

科は今日で置き換えるならば口歯咽喉科であり、このような区分は現代の西洋医学ではないものである。基本的に近代歯科医学は江戸時代からの伝

承はほとんどない事も大きな特徴であると考え

(平成23年12月例会)

新たに判明した忠犬ハチ公の死因について

中山 裕之

忠犬ハチ公は、渋谷駅前で亡き飼主を10年間待ち続けた逸話で知られる秋田県産の日本犬で、1935年3月8日に満11歳で同駅周辺にて死亡したとされている。遺体は、同日東京帝国大学農学部獣医学科病理細菌学教室(現・東京大学大学院農学生命科学研究科獣医学専攻獣医病理学研究室)に搬入され、病理解剖が実施された。病理解剖の際に採取された主要臓器(肺、心臓、食道、肝臓、脾臓)は、ホルマリン固定標本として当研究室に保管されている。

ハチ公の死因については、病理学研究室に保管されている解剖記録と現存する固定臓器の観察により「慢性犬糸状虫症」と考えられている。しかしながら、これまでハチ公の死因について組織学的検索により詳細に検討されたことがなかった。そこで今回、ホルマリン固定されたハチ公の臓器(肺、心臓、肝臓、脾臓、食道)について、病理組織学的検索を行い、肺と心臓についてはMRI検査も行ったので、結果の概要を報告する。

病理組織学的所見

組織観察をおこなった肺腫瘍のすべてに腫瘍性病変が確認された。腫瘍病変は肺の固有構造を置換しながら、巣状ないしびまん性に広がっていた。病変部では中型から小型の紡錘形ないし多角形の腫瘍細胞が、肺胞内や細気管支腔内に充実性に増殖するとともに、大型の気管支枝周囲の結合組織に浸潤増殖していた。一部には軟骨様組織も認められた。腫瘍細胞が大型の血管やリンパ管内に浸潤する像も頻繁に認められた。

心臓でも上記腫瘍細胞のびまん性ないし巣状増殖巣がおもに心内膜下において広範に認められた。静脈と思われる大型血管を同腫瘍細胞塊が塞

栓する像も頻繁に観察された。冠動脈壁は著明な線維性肥厚を示し、陳旧化した梗塞巣と思われる心筋の線維化病変もまれに認められた。

肝臓、脾臓、食道には肺と心臓でみとめられた腫瘍細胞の増殖巣は認められなかった。肺と心臓については免疫染色も行ったが、長期間の固定による抗原失活のためいずれも明瞭な陽性反応を確認することはできなかった。

MRI検査

ホルマリン固定された心臓と肺について、固定液に浸漬した状態でT1およびT2強調下のMRI検査を実施した。その結果、T1強調条件下において高信号を示す腫瘤性病変が肺のほぼ全葉に観察され、さらに心臓の右心室壁、中隔壁、左心室壁にも多発性ないしびまん性の病変が観察された。

考察

今回の検索により、ハチ公は、慢性犬糸状虫症に加えて肺と心臓の悪性腫瘍に罹患していたこと、およびこの腫瘍もハチ公の死因として重要であることが新たに明らかにされた。この腫瘍の組織診断は形態学的に悪性度の高い「癌肉腫」と考えられた。今回確認された悪性腫瘍の原発部位を特定することは困難であるが、腫瘍病変は肺と心臓に限られ肺でより広範な腫瘍性病変が形成されていることを考慮すると、肺に原発した腫瘍が心臓に転移病変を形成した可能性が高いと思われる。これらのことから、今回確認された肺と心臓の悪性腫瘍はハチ公の直接的死因として非常に重要であったと考えられる。

(平成23年12月例会)